

2026 年度

国府台女子学院 中学部

第 1 回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. **答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。**
5. 長文読解の解答に、常用漢字以外の漢字を使用することもあります。本文中の漢字をよく見て解答すること。

のアーオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

私は歌が大好きで、中でもこの曲は、いつも歌う私のおはこなんです。

- ア 十五番 イ 十六番 ウ 十七番
エ 十八番 オ 二十番

問九 次の——線部の意味を表すのに最も適切な四字熟語をあとのアーエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

合格目指して、他の事に心を動かされず、ひたすら気持ちを集ませ、勉強に取り組んだ。

- ア 一望千里 イ 一意専心
ウ 一騎当千 エ 不言実行

問十 「ほうほうの体」という言葉について、最も適切な説明を次のアーエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「方」を重ねて読んだことにもとづく言葉で、どちらの方向にも曲がった部分はなく、きちんと整えられている様子を表す。

イ ため息が「ほうつと」出てしまう様子にもとづく言葉で、あまりにも悲惨なことが目の前で起きて、じっとしてられない様子を表す。

ウ 「這う」を重ねて読んだことにもとづく言葉で、あまりにもさんざんな状況におかれて、今にも這い出し逃げねばならない様子を表す。

エ 「ほつほつ」にもとづく言葉で、ゆっくりとした、ある一定のスピードで物事が継続的に進んでいく様子を表す。

問十一 「かまける」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話が通じれば主語がなくてもかまいません。

【二】 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

嘘をつかないような生き方をしている人のことを「正直だ」とか「誠実だ」と言うことがあります。ではまず、正直であるとはどういうことでしょうか。

正直であるとは絶対に嘘をつかないことだ、という答えについて考えてみましょう。絶対に嘘をつかないということは、どんな状況にあっても、誰に何を聞かれても、必ず、自分がそう信じていることをそのまま口にするということでしょうか。ということは、本当のことを言えば周りにからかわれたり、あるいは人命が危うくなったりするような場合でも、やはりそのまま自分が信じている通りのことを言うこととなります。

自分や他人を守るために必要な場合でも、思ったことをそのまま（①）に口にするのが、尊敬の念を込めて正直と呼ばれる人の生き方でしょうか。どうもそのようには思えないのではないのでしょうか。全く嘘をつくこともなく、このような状況なら嘘をついてもよいんじゃないか、という心のブレもないとなると、「馬鹿正直」という言葉があるように、たしかに正直なのかもしれないけれど、思慮に欠けるように感じられるようです。

自分や他人を傷つけても嘘をつかずに思ったままのことを言う人は、多くの傷を負い、多くの傷を与えるでしょう。そのような痛ましい状況に対して、「馬鹿」という言い方で済みますことが適切には思えません。では、嘘をつかないあり方が正直であり、正直であることはガラス張りの状態になることで

はないのであれば、それはどういう生き方なのでしょうか。

私たちは時として「あの人は正直な人だ」と、その人の立派さを認めて言うことがあります。それはどういう人のことでしょうか。

ドイツの教育哲学者であるオットー・ボルノー（一九〇三〜九一）は、「率直」と「正直」を区別し、「率直」が「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のに対して、「正直でありうるのはつねに、自分自身に対してとられず自由な態度をとるか、それとも自分自身を見捨てるかという二つの可能性を自らのうちにもっているような存在だけである」と述べています。

まず、「率直」であるというのは、ごまかしや嘘がなく、自分が信じていることをそのまま言い、自分が信じていることと言っていることが一致していることです。「絶対に嘘をつかない人」として先に見たようなあり方は、この意味で「率直」だとは言えます。ボルノーによれば、このような率直さは「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のであり、つまりは、まだ嘘をつくことのできない子どもに見られる状態です。他人に対する不信を知らず、内面を隠すことを知らない状態であり、事実として嘘をついていないとしても「嘘はつかないぞ」という意志を自らで働かせたわけではありません。

「嘘はつかないぞ」という自発的な意志を働かせるためには、嘘をつく能力を身につけている必要があります。内面を隠したり、他人を騙す意図をもったりすることができない限りで、「嘘はつかないぞ」という決断もできるのです。つまり、嘘をつかないという自発的な意志を働かせるためには、自分の都合が悪くなれば嘘をつく誘惑にかられてしまったり、本当のことを言ったら周りにからかわれると分かれば嘘をついてその場をしのごく技術をもっていたりしなければなりません。自分が信じていることを隠しておくことができなくてはならないのであり、つまり、ボルノーの言うように「特別な内面性を形成し遂げている」必要があります。単に「率直」ではなく「正直」である

ためには、社会がどういふところかある程度認識しており、ある状況に陥れば嘘へと誘惑されるような心の側面をもっていなければなりません。

実際、「あの人は正直だ」と賞賛を込めて言われる人は、全く無垢な人ではなく、普通の人であればつい嘘をついてしまうような場面でも、ぐっと思いとどまってそうしない、そういう精神的な力をもっている人でしよう。嘘をつけば利益を得られそうな場面、嘘をつけば不都合な状況を取り繕うことができそうな場面、あるいは、嘘をつけば表面的には人間関係を維持できそうな場面で、やっぱり、嘘をつくのは止めようと思いとどまり、自分が信じていることを正直に言ったり、相手とオープンに話し合うために努力したりする人でしょう。

ボルノーの言葉に戻りましょう。正直な人は、「自分自身に対してとられず自由な態度をとるか」、「自分自身を見捨てるのか」という二つの可能性の間で葛藤する存在です。このような心の葛藤を経験できるといふことは、正直に本当のことを言うか、嘘をついてその場をしのごくか、というジレンマに立てることだと言い換えてもよいでしょう。

しかし、なぜ、嘘をついてその場をしのごくことは「自分自身を見捨てること」であり、本当のことを言うことは「自分自身に対してとられず自由な態度」を取ることなのか。

（中略）

嘘をつくこと、「嘘をついた」と相手に言うことができず、また、一度嘘をつくとその嘘と辻褃の合うように嘘を重ねるしなくなります。言いかえれば、自分自身が相手にやったことや思ったことについて相手と自由に話すことができなくなり、どれほど後悔しても嘘をつく前には戻れないという苦しみがあります。つまり、成り行きに振り回され、自由を失い、自分が望むように振る舞えなくなってしまうのです。ここで、自分の気持ちを押し殺し、苦しみのなかに自分を閉じ込め、偽りのない人間関係を取り戻す希望も失ってし

まうとすれば、ボルノーが言う「自分自身を見捨てる」ことになるでしょう。

しかし、嘘のせいで自分自身を見捨てそうになっても、私たちには「自分自身に対してとらわれず自由な態度」をもつ可能性も残されているとボルノーは述べています。友達と遊んでいたらつい楽しくなって恋人との約束に遅れてしまった時、自分の不都合を取り繕うために何気なくついた嘘が大きくなってしまう、恋人に悪いと思ってもあれは嘘だったと言えない時、自分の思っていることや自分が今日したことなどをオープンに話せる仲がどれだけ貴重であるかが身にしみるでしょう。その気持ちに忠実になるなら、どんなに謝ることになっても、あるいは呆れられることになっても、本当のことを話そうという勇気をもてるかもしれません。そして話してみたら、恋人は呆れることも、謝ることを求めることもなく、「気にしないでいいよ」と言ってくれるかもしれません。その時には、相手はどうせ怒るだろうと決めつけていた自分の小ささに恥ずかしくなるかもしれません。自分自身に対して自由な態度をもつということは、さまざまな思い込みや恐れにとらわれずに、自分に素直に、自分らしくあるとすることだとと言えるでしょう。

嘘をついて自分を失ってしまう可能性と自分に忠実に自分らしくある可能性の間で、葛藤できる心(内面性)をもっていることが、正直であることには必要です。正直であるために必要なのは、裏表がないことではなく、嘘をつきたくなくなるときにくつと思いとどまる意志であり、嘘をついてしまった時にも本当のことを話そうとする意志を失わないことです。以上のことから興味深いことに気づかされます。正直であることは、一方で他人に対して嘘のない生き方であり、つまり、他人を傷つけたり他人のリガイ関心を決めつけたりすることへの抵抗があり、他人とオープンに對話することを求める生き方だと言えます。しかし同時に、正直であるとは、自分自身を大切にすることであり、自分らしくあることをセツボウすることなのです。

嘘のない生き方については「正直」の他に「誠実さ」という概念もあります。ボルノーによれば、「誠実は、開放性と純正さが人間にとつて自由に選ばれた目標となるところではじめて発生する。誠実は一つの抵抗から無理やり奪い取られた、人間の自己自身に対する透徹さである」ということです。誠実さとは何か、この文章を解釈しながら考えましょう。

まず、誠実さは、単に正直であるだけでなく、嘘がなく自分らしく生きることを「目標」として生きるあり方に関わっています。別の例で言えば、勇敢な人のなかにもさまざまな人がいます。ある人はごく自然に勇敢に行動します。ある人は自分が臆病であることをよく知っていて、臆病さを克服して勇敢になることを目指しています。(⑤)と言ってもよいでしょう。

正直でいたいと望み、嘘をつく誘惑を克服したり、本当のことを話したりするあり方においても、どれだけこのことに悩み、どれだけこのことを人生の重要な目標としているかには程度差があるでしょう。外面的に見てその人が勇敢か、あるいは正直かという点では同じであっても、その人の心のなかで何が起きているかはさまざまです。誠実さは、自分のあり方に悩み、自分らしさを求めるその心の働きに対する名称だと言えるでしょう。

勇敢であることを目標にするには自分の臆病さをよく知らなければならぬように、誠実であるためには、まず、自分の不誠実さをよく知らなければなりません。ボルノーによれば、不誠実の精神に引き入れられることは、個人が、権威をもった集団からの期待やその集団の価値判断に順応する傾向において生じるものです。本書の議論で見てきたように、嘘をつくという実践は、例えば、本当のことを言ったら周りに変に思われるという同調圧力によって誘発されまます。この嘘の誘発においては、たしかに多数派の集団が何を普通と見なすかなどの社会の価値判断に順応していると言えるでしょう。しかしこうした場

合だけでなく、善意の嘘が口をついて出てくるということには、コミュニケーションの固定したパターンをなぞっているという側面がありました。この場合にも社会の期待に順応する面があります。さらに、自分の過ちをごまかそうとする嘘は、どういふことをすると怒られるのか、どういふことをすると罰せられるのかという社会の状況を認識した上で、状況に対処するためにつかれるのでした。この場合にも社会の価値判断に沿った対応という面が見られます。

子どもが成長するということには、社会化され、世の中の期待や価値判断に順応していくことが含まれます。ということは、ギャクセツ的ですが、子どもが一人の人間として成長することには、自分のやっていることは自分らしくないという感覚をもつことも含まれるでしょう。自分がやっていることは結局周りに合わせているだけなのでないか、という疑問をもつ、と言い換えてもよいでしょう。

嘘をつくことは内面をもつことの実践であると同時に、本当の自分と見せかけの自分の分離を経験することであり、他人とやり取りしている自分は本当の自分ではないという感覚を育てることであります。ボルノーは「かかる順応がまだ無自覚な形で起こる場合には、まだ誠実とか不誠実の問題はまったく存在しない」と言います。成長し、社会に順応するなかで自分らしさを失っていることを自覚するとき、自分を失うことへの抵抗としての誠実さが目標として目覚めてくるのです。

以上のように、誠実さは自分らしくあることを自分で「目標」として選ぶ取るところに成立します。その目標はより具体的には「開放性と純正さ」と呼ばれていました。開放性とは、簡単に言えば、オープンであること、打ち開かれていること、あけっぴろげであることです。純正さとは、ありのままであることだと言えます。私たちには、ありのままにオープンに人に接する人間でありたいと思うことがあるでしょう。しかし、これは、社会に順応す

ることで成長した大人にとっては非常に困難であり、ことさらに人生の「目標」とされるようなものです。

ボルノーによれば、開放性は先天的なもので、純正さは自然に与えられるものです。どんな大人も生まれた時には、何も隠すことはなく、あるいは隠すこともできず、すべてはオープンだったはずで、嫌であれば大泣きし、好きなものをもらえばニコニコし始めたのではないのでしょうか。純正さ、つまり、ありのままであることも、最初は、努力して達成することではなく、単に自然とそうだったはずで、しかし、これらの開放性や純正さは、社会に順応して一人の人間として成長するなかで失われていきます。ありのままの自分で、オープンに人に接することができればどんなによいでしょう。しかし現実には、胸を張って、私は自分らしく偽りのない人生を生きていると言える人はほとんどいないのではないのでしょうか。

生まれつきの仕方オープンであることが失われた後、それでも隠し立てなく打ち開かれたあり方をしようとする、かえって「悪しき開放性」や「悪しき閉鎖性」に陥るといふ難しさをボルノーはシテキキしています。他人に対してオープンに振る舞おうと努めて試みると、必要以上に馴れ馴れしくしたり、軽率に言うべきでないことも口にしたりして、結局は他人に対して失礼になってしまふという「悪しき開放性」に陥る危険があります。他方、他人にあまりに近づきすぎないように気をつけると、他人と話すことを恐れ、小心になって自分の殻に閉じこもったり、自分はこれでよいのだ、他人と話す必要なんてないんだと開き直ったりする「悪しき閉鎖性」に陥る危険があります。

また、「ありのままである」というのも、自然にそうであった時期を過ぎて、周りの期待や価値基準に合わせて行動するようになった後では、簡単ではありませぬ。誰かと話す時に、相手が自分に言って欲しいと期待しているであろうことを言うのではなく、自分が思っていることをありのままに話そうと

問三——線部②「適切には思えません」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 尊敬の念を込めていても「馬鹿正直」だと発言することは相手を傷つける思いやりに欠ける行動であるから。

イ 自分や他人が不快な思いをする可能性を考えないで自分が信じていることを発言するのは「馬鹿正直」なことだから。

ウ 嘘をつかず何事もあるまに話す人を「馬鹿正直」のような言葉で単純に扱(あつか)うのはふさわしくないから。

エ 正直であることをユーモラスに「馬鹿正直」と表現することの面白さに気づけずに悲しい思いをする人がいるから。

問四——線部③「嘘をつく能力」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘘が不要であった幼い頃のような心を持ち続けることで、周囲からの信頼を得ることができる能力。

イ 嘘がもたらす相手への影響を明確に想像した上で、場面を問わず積極的にだますことができる能力。

ウ 裏切られた経験があったとしても、都合のいいタイミングで人を騙して傷を癒やすことができる能力。

エ 自分の立場や周囲の状況を見極め、不都合な事態ならば嘘も有効な場合があると判断できる能力。

問五——線部④「正直な人」とありますが、どういう人ですか。その説明

として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘘をつくことがいけないことだと理解していても自分が損をしそうになるとすぐに周囲を欺(あざむ)き、時間が経ってから激しく後悔して自暴自棄(じほうじ)になってしまう人。

イ 自分を苦しめることや周囲が不利益な状況に陥ることを避けるために嘘をついてやり過ごすか、自分自身を偽(いつわ)ることなく素直に告白するかの中で悩むことができる人。

ウ 周囲の人間にかけてしまう迷惑や不利益をかえりみず、自由気ままな自らの意志と行為を尊重し、迷惑をかけてしまったときは素直に謝る心がけを忘れないようにする人。

エ 「嘘はつかないぞ」と何度も言い聞かせて自分の行動は厳しく振り返り管理するが、他人には老若男女問わずにやさしい声かけをする努力を惜(お)しまない人。

問六 (⑤) に入る文として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の夢を叶(かな)えたいと望む者だけが、その夢を達成することができる

イ 自分の悩みを打ち明けられる者だけが、安心して暮らすことができる

ウ 自分の弱さをよく知る者だけが、強くなることを目標にできる

エ 自分の心をうまく語れる者だけが、成功を収めることができる

問七 次の文は——線部⑥「大きな困難」について説明したものです。() に入る言葉を指定字数にしたがって本文中からぬき出して答えなさい。

幼いころはオープンかつありのままに振る舞っているが、次第にまわりの人の（1…二字）や（2…二字）観に合わせた言動をするようになる。つまり大人になるにつれて（3…二字）化していくのである。そのような状態が当たり前になった大人には、幼いころと同様に振る舞うことは極めて難しいのである。

問八 —— 線部⑦「自分自身に対する『透徹さ』、つまり自分自身のことを透き通るように知ること」とありますが、具体的にはどのようにすることでしょうか。「〜こと」に続くように二十五字以上三十字以内で本文中から探してぬき出し、はじめと終わりの五字を書きぬきなさい。

問九 —— 線部⑧「うそはくるしいと知っているから」とありますが、なぜ「くるしい」と思うのでしょうか。【文章Ⅰ】のボルノーの言葉から、「〜だから」に続くように十一字で本文中から探して書きぬきなさい。

問十 【文章Ⅱ】に載っている「うそ」という詩は（⑨）の部分^ぬが抜けています。ここに入るものとして最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どうしてもうそがつけなくなるまで／いつもほんとにあこがれながら
- イ すなおにすごしていくべきだと／ほんとはおもっているのだけれど
- ウ だれかにうそをつくということが／ほんとにへいきになるひまで
- エ しょうじきにいきていかないと／ほんとにわるいことがおこるから

問十一 この文章（【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】どちらも含む）についての意見とし

て最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 谷川俊太郎の詩の中では「あやまってすむよううそはつかない」と言っているけれど、間違えてしまったときは謝らなくてはいけないと思うな。筆者も嘘をついたらすぐ謝れば解決すると言っていたよね。
- イ 謝ると言うことはけんかした相手と仲直りするだけではなく、自分の苦しみからも逃げられるようになるよね。自分らしくいるためにも必要だと思うな。

ウ 自分の間違いを素直に謝ることも、意見をまっすぐ述べることもとても勇気がいるよね。だからこそ勇敢な人はいつそう他人からの信頼を得られると思うよ。

エ でも、全ての人が勇敢であることは難しいと思う。勇敢ではなくても、自分に自信を持って他人と距離をおくことで自然と自分らしさが保たれるんだと思う。

